

第7章 『ドンビー父子』  
疾走する汽車と暴力

松村 豊子



「ドンビー氏とあらゆる点において全く異なる人物」  
(第2章、フレッド・バーナードの挿絵、ハウスホールド版)

## 第一節 決闘の封印

『ドンビー父子』を繰り返し読む醍醐味は、間違ひなく、疾走する汽車の臨場感溢れる第二〇章と第五章の描写にある。跡取り息子を病気で亡くした傷心のドンビーにとつて、鉄道は「死神」や「怪物」と映る一方、彼の妻イーディスと出奔し、追われる身となったカーカーはドンビーの眼前で「赤い目」をした「怒りの火」を噴く「怪物」に轢き殺される。この作品を暴力という観点から読むと、ディケンズが当時の科学技術の発展と自由競争の急速な激化に鑑み、暴力を従来とは異なる視点から詳細に検証し、新しい物語を構築していることが明らかになる。新たに敷設された鉄道は新しい時代の到来を強烈に印象付けているのである。

全世界がドンビー父子商会を中心に動いているという幻想をいただき、社長の椅子にふんぞり返る尊大なドンビーと、背後からじつと彼の動静を窺う大番頭カーカー。この作品の主題は彼ら二人が後継者の地位と美女の獲得をめぐる熾烈な死闘を繰り広げる一族会社の御家騒動である。興味深いことは、第四七章でイーディスとカーカーの出奔を知ったドンビーが激怒し、カーカーに決闘を挑むために国外逃亡した二人を半狂乱になつて追跡し、第五章でカーカーを遂に発見し、決闘を目前にするにもかかわらず、カーカーが機関車の車輪に巻き込まれ、轢死することである。なぜ決闘は実現しなかったのか。この要

因の一つは従来慣例的に実施されていた決闘がイギリスでは一八一九年に法律で廃止され、その後、四四年には陸軍省もヴィクトリア女王の強い要請に応え、決闘を厳罰に処するべき重犯罪としたことである。

では、決闘廃止法の制定後、妻に逃げられた夫は、十九世紀イギリスの父権制社会においてどのような行動をとつたのか。一八六〇年から翌年にかけて出版され、一世を風靡したエレン・ウッドのセンセーション・ノヴェル『イースト・リン』のメロドラマでは、残された夫は駆落ちした妻を探そうとせず、事態を放置したまま、数年後に音信不通になった妻の死亡届を教会へ出し、別の女性と再婚する。夫が失踪した妻を追跡も、弾劾もしないため、妻は夫の再婚後、偽名を語り、わが子の家庭教師として彼の元に戻り、不治の病（結核）に冒された息子の最期を看取るや否や自身も病死する。ここでは〈墮ちた女〉の感傷的な母性愛が声高に称揚されるため、決闘に代わる社会的制裁がなされていることは看過されがちである。しかし、夫の姉カーライル嬢は駆落ちした相手の男性に対する世間の敵意を故意に煽り、そして、大衆の面前で彼を貯水池へ放り込ませるのも同じカーライル嬢である。この場面がカーカーの轢死を下敷きにした社会的制裁であることは、「あいつは機関車の衝突事故で粉々になつたんじゃねえか」（第三部第八章）という野次馬の声から明らかであろう。決闘は中世以来、話し合いによる和解が成立しないほど厳しい対立を解消する、男性による合法のかつ感情的な浄化をもたらす手段だったが、十九世紀半ばに

は衰退し、『イースト・リン』におけるシャリヴァリのような女性も参加する社会的制裁に代わられたようである。

『ドンビー父子』では、退役軍人であるバグストック少佐とフィーニクス卿が途方にくれるドンビーに忠言するように、妻に逃げられた夫には採るべき事態の收拾方法が二つあったことが示唆されている。妻を奪った男性を相手どり、訴訟をおこし、損害賠償金(夫には妻の肉体を所有する権利があったため)を請求する場合と、相手の男性に決闘を申し込む場合である。体面と評判を重んじるバグストック少佐とフィーニクス卿は、世間の注目を浴びる離婚裁判を避け、非合法ではあるが、決闘をドンビーに薦める。そして、ドンビーも命を落とすか、怪我をするか、あるいは、警察による逮捕や世間の非難を免れるために国外逃亡せざるをえないにしても、決闘の道を選ぶ。一八四四年に出版されたサッカレーの『パリ・リンドン』<sup>2</sup>でも、決闘相手を殺したと思ひ込み、国外逃亡した主人公はプロシアの軍隊に紛れ込み、姓名も変更する。決闘は生命と人生をかけた対決だったのだ。このようなリスクにもかかわらず、妻と使用人に裏切られたドンビーの怒りと屈辱は、法的に禁止された決闘という形でしか表現できないほど激しかったのだ。

ディケンズはドンビーの激情をほとんど言葉で表さず、ドンビーのロンドンからデジョンまでの追跡についても多くを語らない。彼の追跡とは逆に、追われるカーカーのデジョンから故国への馬車による逃避行では、カーカーの筆舌に尽し難い焦燥感と恐怖が繰り返し畳み掛けるように語られる。



図版①「暗夜行」(第55章、フィズの挿絵)  
前方でなく後方を気にするカーカーの姿が印象的である。

ガタガタ揺れる馬車の震動は逃亡者のこのころの焦燥感と不協和音に共鳴した。物は飛び去り、互いに溶け合い、仄かに見え、霞み、混乱のうちに消え去った！ 沿道の垣根や家が次々と飛び去る彼方には、低地の荒野。彼のところに走馬灯のように浮んで消える心象の彼方には、恐怖と怒りと裏切った極道の闇が広がっていた。時に、遙か遠くのジュラ山脈からため息のように山風が吹き、草原に消えた。そして、怒り狂い、ぞつとするあの疾駆が再び彼の空想にどつと流れ込み、彼の血を凍らせ、消え去った。(第五章)

図版①は追手の気配に怯えながら、暗雲立ち込める夜道を馬車で疾走するカーカーの不安げな姿を描いた挿絵である。逃避行の緊迫感から推すと、ドンビーはカーカーに追いつくや否や、決闘に必要な介添人(バグストック少佐)の到着を待たずして、殺し合いを始めそうな勢いである。実際、カーカーはドンビーの姿を見かけた刹那に恐怖心から線路に転落し、驀進する汽車に轢かれ、事故死する。

叫び声が聞えた——もう一度——追手の顔が怨念から微かな吐き気と恐怖へと歪むのを目にし——大地が揺れるのを感じ——一瞬にして驀進が迫り来るのを知り——絶叫し——振り向き——真つ赤な目が日光にぼんやり霞み、目前に迫っているのが分かるや否や——叩きつけ、掬い上げ、ぎざぎざの旋盤に巻き込まれ、ぐるぐる振り回され、手足は引き裂かれ、命脈は灼熱

に吸い尽くされ、粉々に吹き飛ばされた。(第五章)

カーカーの鉄道による轢死は亡骸が人間の痕跡を留めないほど壮絶である。決闘は未遂に終わるが、彼の死は決闘に勝るとも劣らない衝撃をドンビーに与え、ドンビーは轢死を間近で目撃すると、しばし失神する。彼はこの衝撃の反動から後に極度の自暴自棄に陥り、会社を破産させ、家庭と家族を崩壊させる。

カーカーの轢死、そして、ドンビーの破産を引き起こす、驀進する汽車は、決闘で飛び交う弾丸の代替物の役割を果たしている。しかしながら、その衝撃的な結末の悲惨さは決闘のそれの比ではないし、また、破壊力とスピード感において被害は馬車事故の場合をはるかに凌ぐのである。一例を挙げると、処女作『ピクウィック・クラブ』におけるウィンクルとスラム軍医との奇妙な決闘場面(第二章)からも明らかのように、決闘では対決の日時が指定され、しかも、介添人が立ち合うため、土壇場での中止、あるいは、決闘後の和解も可能である。このように考えると、ピクウィック・クラブの面々による全国行脚が心温まる主因は、彼らの旅が鉄道でなく馬車によることに求められるのである。馬車事故ではたとえ命を落としたとしても、亡骸が粉々になり、遺族に渡す遺骸さえないということはない。驀進する汽車は『ドンビー父子』では名誉や人格といった文化的な価値を情け容赦なく一瞬のうちに瓦解させ、人間を純粹な物質に還元するのである。タンプリングはカーカーの最期を「この小説では描ききれず、変化という名目のもとに抑圧された別

の恐ろしい物語の一部である」(Tumbling, Dickens 66)と興味深い指摘をしている。疾走する汽車は、確かに、名誉を重んじる決闘とは異質であり、非人間的な機械文明の到来を告げる、謎めいた力強いメタファーとして機能している。

では、事故後に破産し、家族を失い、自己崩壊するドンビーはどのように救済されるのか。彼の救済への道は、他の登場人物たちによる出奔・追跡・発見のパターンの繰り返しの中に示唆される。最も影響力があるのは、ドンビーに西インド諸島へ左遷され、道中すがら遭難するウォルターの旅と、ドンビーに商売には役立たない「使用不可の硬貨」(第一章)として疎んじられるフロレンスの旅である。遭難したウォルターは運よく中国船に救出され、無事に帰国し、フロレンスと結婚した後、彼女を伴い中国へ赴き、帰国後、倒産した父子商会を再興する。フロレンスはドンビーの殴打を機に家出し、ウォルターと結婚し、ドンビー父子商会の跡取り息子を産み、中国からロンドンへ戻ると、自宅に一人で引きこもるドンビーを発見する。若い二人に限らず、ここでは実に多くの人物が世界中を旅し、ドンビー父子商会の栄枯盛衰に大なり小なり何らかの形で影響している。例えば、失踪したウォルターを見つけるため、彼の航行を追跡するソロモン・ギルズは、世界中を旅し、ロンドンへ戻り、ウォルターと運よく再会し、彼がフロレンスと結婚する手助けをする。罪人としてオーストラリアへ流されたアリス・マーウッドは刑期を終えた後、ロンドンの古巣へ戻り、彼女を破滅させたカーカーの言動を母親と共に四六時中見張り、

最後にドンビーが逃げたカーカーを追跡するように仕向ける。ドンビーにイーディスとの結婚や決闘を唆すバグストック少佐は大英帝国を駆け巡った軍人である。このような海外、特にオリエントへの旅では、彼らがドンビーとカーカーの対決以上に過酷な暴力に晒されたにちがいないと容易に想像できるにもかかわらず、テクストにはそのような暴力への言及は一切ない。『ドンビー父子』では、彼らの旅はすべて鉄道のレールが時に交わるように互いに交差し、軌道修正しながら、最終的に家族との再会や和解で終わるのである。

## 第二節 虐待の激化

決闘が人間関係の破綻を修復する方法として機能しなくなると、暴力はどのように変容するのか。富の有無、また、損得がすべてを決定するドンビーの世界では、暴力はこれまで以上に激化し、強者から弱者へ一方的に、後者が生存のために反撃せざるをえなくなるほど過激に向けられるようになる。まず、本節で家庭外の場合について、次節において家庭内の場合について考察したい。

弱者に対する暴力的支配の最たる例は、大英帝国の各地で縦横無尽に戦ってきた陸軍退役将校バグストック少佐と、彼が植民地から連れてきた黒人下僕のネイティヴとの関係であろう。殴打や平手打ちは日常茶飯事。夜になると、ネイティヴはベッドでなく戸口の外の床で寝る。少佐の関心はもっぱら旺盛な食

欲を他人（特に大金持のドンビー）の金で満たすことに向けられる。彼が時として「食べ過ぎたメフィストフェレス」（第二〇章）に喩えられるのは、ドンビーが彼の進言を疑念なく受け入れ、実行するからである。彼はドンビーに媚び諂ひながら、常にドンビーを意のままに操っているようにさえ見える。ドンビーとイーデイスの仲をもつているかと思えば、二人を仲違いさせ、カーカーの競争心を煽り、イーデイスとの出奔を促し、遂にドンビーに決闘を決意させる。イーデイスとドンビーの結婚に関して言えば、娘を最高値で買い取る婿を躍起になつて探すスキュートン夫人の目論見とバグストック少佐の利害が一致するため、少佐のドンビーに対する影響が赤裸々に現れただけである。ドンビーが出奔した妻の跡を追ひ、最終的にカーカーと決闘することにした主因は、ドンビー自身の強い意思というよりむしろ、少佐が時間をかけて念入りにこの筋書を準備したためと言える。少佐について興味深いことは、デイケンズが彼をドンビーの参謀にし、ネイティヴに対する日常的な虐待行為の是非を全く論じていない点である。ここでは、デイケンズの人種差別意識が強く、被支配者である黒人は日陰の存在としてひたすら搾取され虐げられるだけなのである。

このような支配と服従の關係は、カーカーと彼に個人的な密偵として雇われるロビン・トワードルとの關係でもある。ロブことロビンはカーカーの暴力に怯えるあまり、彼の目配せだけで、彼の要求を察知し、用を足す（第二章）。また、彼はカーカーを街頭で見かけると、約束した場所の通りより一つ前の通

りから彼の気を引こうとして懸命に帽子を振り、カーカーが乗る馬の脇を伴走したりもする。ロブの忠誠心は奇妙なことに卑屈でもある。つまり、カーカーはロブに暴力をふるう必要がないほど彼を威圧し、自由意志を奪ひ、支配しているのだ。

ロブについて興味深いことは、彼がカーカーだけでなくアリスと彼女の母親にも暴力をふるわれる点である。アリスはかつてカーカーの欲望の犠牲となり、流刑に処せられたことで彼を恨み、彼を破滅させることを生き甲斐にしている。ロブからカーカーとイーデイスの出奔先がどこかを聞き出す場面（第五章）では、彼女たちはドンビーの前で一芝居打ち、ロブに飲酒を勧め、彼の首を絞め、身体を羽交締めにし、あらん限りの罵声を彼に浴びせ、彼が意に反してカーカーの出奔先を漏らすように仕向ける。ロブはかつてカーカーにドンビー一家に関する個人情報を買ったのであるが、アリス母娘には凶らずもカーカーに関する情報を漏らすこととなる。ここでは、諸々の情報が売買される過程において、人間關係が微妙に変化し、最終的にドンビーの決闘へとつながる。力關係の序列化は男女の区別なく、また、階級の区別なく、暴力と切り離せないのである。

ところで、娼婦・泥棒・前科者であるアリスの物語は、彼女にカーカーに対する強い殺意と激しい嫌悪感、そして、自らをモはや買手がつかない商品、つまり、母親が売り歩く「汚れたぼろ布」（第四〇章）とみなす卑屈な自己認識がなければ、デフォーの『ロクサーナ——幸運な娼婦』（一七二四年）のヒロイン、ロクサーナのような娼婦の一代記として読めるかもしれ

ない。アリスの復讐心が強烈で、しかも、彼女の自己認識がイーデイスのそれ（結婚市場で競売にかけられる高価な商品）と酷似するため、彼女の物語はドンビーの決闘未遂事件の重要な伏線となる。

図版②はスキュートン夫人が脳卒中の発作に襲われた後、イーデイスを伴い、病氣療養のために訪れたブライトンの浜辺でアリスと彼女の母親に遭遇する場面の挿絵である。年老いた母親二人は共に娘の見目麗しい外見と魅惑的な肉体に高値がつき、確たる金づるを見つけることが最善だと疑うことがない。母親たちとは対照的に、娘たちは共に装飾的な商品に還元される自らの存在の虚しさを呪い、それぞれの母親を責めたてる。

老婆は立ち止り、スキュートン夫人に物を乞うように手を差し出した。娘も同時に立ち止まり、イーデイスを見詰めると、イーデイスもじつと彼女を見つづけた。

「何を売ってるのかしら」と、イーデイスは尋ねた。

「これだけさ」と娘は売りぐさに目もくれずにつきだした。

「あたいのことはとっくの昔に売り払ったもんだからさ」

「おお、奥さま、この娘の申すことに耳を貸してはなんねえですだ」と、老婆はスキュートン夫人にしわがれ声で言った。「聞いちゃなんねえですだ。口癖のようなんだからさ」（第四〇章）

ここで不思議なことは、肌が触れ合わんばかりに鼻を突き合わせる母親二人と、彼女たちの背後に控え、互いをじつと見詰める



図版②「遭遇」（第40章、フィズの挿絵）

富裕層の母娘が高級リゾート地ブライトンの浜辺で乞食の母娘と出会い、言葉少なに意思の疎通をはかる奇妙な場面。

る娘二人という左右対称の構図から、金持と乞食という社会的身分の違いから当然生じるはずの文化的差異が欠落していることである。虚栄心の強いスキュートン夫人が貧相な泥棒や乞食と人目のある往来で、しかも、真昼に世間話をするのは、読者にとって想定外の出来事であろう。この文化的差異の欠落の理由は、自由競争原理の導入による社会的な混乱とも考えられるが、それよりもむしろ、彼女たちがドンビー等の男性の欲望を満たす客体として自己を認識し、その意識が回復不能なほど歪んでいる点で身分の差をこえて同等であるためである。

「遭遇」の場面に登場する四人の女性はそれぞれ異なる事情から、ドンビーの世界に上手く適応できない文化的他者として描かれている。虚栄心が強く、衣装と化粧で飾り立てた外見の美しさにこだわるスキュートン夫人は脳卒中を患い、今や自慢の容貌も見る影もなく衰え、言語障害さえ併発している。彼女の現実認識力はきわめて低い。イーデイスは自意識が強く、高値で買われた花嫁という社会的立場を耐えがたい屈辱と感じ、自身の身体（胸）を強打し（第二十七章）、最終的に当時は自殺行為とみなされた駆落ちさえやってのけようとする。アリスとイーデイスは自己を商品と認識する点において同じだが、アリスは泥棒・娼婦という無法者であるため、彼女の疎外感はいーデイスのそれとは比較にならないほど強いと思われる。ディケンスは物語の展開において、アリスの救いはカーカーの心優しい妹ハリエットとの和解にあると独断的に判断を下している。しかし、アリスが経験したであろう暴力と心身の傷は、無垢な

女性であるハリエットに癒せる性質のものではないのではないだろうか。彼女は自己を「汚れたぼろ布」と見ることで、身を苛むばかりの疎外感から辛うじて正気を保つタイプの女性のよう<sup>3</sup>に思われる。櫛を通さない乱れた女性の髪は狂気を象徴すると一般に言われるが、挿絵にみるアリスは狂気と正気の境界線上にるように見える。

ブラウン婆さんは時間と場所の区別なく、常に売れるもの（特に女性の性）を探し出し（時には盗み）、それを一銭でも高く売る。自身の娘さえかつて嬉々としてカーカーに売り飛ばした。アリスがどんなに酷い悪態をつこうが、どんなに重い罪を犯そうが、母親の方は全く気にせず、娘の美しい身体を依然として羽振りのよい男性（ここでは特にカーカー）に高値で売り付けようと目論んでいる。旺盛にして無軌道な、しかも無尽蔵とも思える商魂において、彼女に優る人物はこの作品にはいない。バグストック少佐とカーカーが商売よりも快楽に傾倒し、ドンビーが体面と権威に拘泥していることを考えると、彼らが暗黒街の名もなく貧しい存在として蔑むブラウン婆さんこそが自由貿易や自由競争という時代の精神を体現していると言っても過言ではない。最下層階級の老婆を男性陣より上位におく価値の逆転は、ディケンスが男性たちの暴力と切り離せない関係にある「汚れたぼろ布」を嫌悪すると同時に、それに強烈に魅了されていなければ起こりえなかったことと思われる。

以上のように、名誉や体面に命をかける決闘が封建的な風習として封印されると、暴力は質的に大きく変化し、権力構造が



再構築される過程において広く甚に蔓延するようになる。女性や子どもをも無視できない形で暴力に巻き込む『ドンビー父子』の世界では、皮肉なことに、ブラウン婆さんのように男性の上に位置する女性も時として現れるのである。

### 第三節 家庭内における暴力の規制と抑制

『ドンビー父子』を暴力の観点から語る時、避けられないのはイーディスとカーカーの出走を知ったドンビーが怒りにまかせ、イーディスの美しい顔面でなくフロレンスの胸を青あざ

が残るほど強く殴打することである(第四七章)。家父長制度が廃止されてから久しい今日、フロレンスが暴力をふるったドンビーに一方的に自身の非を詫び、許しを請うことは理解し難いのではないだろうか。とは言え、家父長制社会では父親の権利と権威は家族内に限らず、広く社会的に絶対的なものとして機能していたのである。リサ・サリッジは『ドンビー父子』では家族崩壊(妻の出走、父親による娘への暴力、そして、娘の出家)と会社の倒産がほぼ同時に起こることに着目し、ドンビーの「男らしさ」は家庭内暴力を引き起こしたことによって自力での回復が不可能なほど傷ついたため、彼の権威は母性愛豊かなフロレンスが謝罪する形でしか回復できなかったと解釈し、中産階級では家庭の平和維持が主要な階級表象だったと結論付ける(Surrage, BH 45)。サリッジのこのような指摘は当時のドメスティック・イデオロギーに適った正論である

ため、異論を唱えるのは難しい。しかしながら、封建的な父親と、彼が長年の間「使用不可の硬貨」とみなした娘の情緒的な絆に焦点をしばらくと、父親の改心が至難の業であることが分かる。ドンビーは社運の浮き沈みにかかわらず、娘に対して終始沈黙しがちだが、娘と和解した後の沈黙が特に色濃いため、ドンビーだけでなくディケンズ自身にも家庭内において軽視しがちな娘に向ける愛情表現の言葉が足りないのではないかと危ぶまれる。ディケンズは不和から和解へと変容する父娘関係を必ずしも顔面通りに受け取っているわけではないのである。

第一節で述べたように、名誉に命をかける決闘は、家父長制社会では主要な男性文化の一つだった。だが、十九世初頭に決闘禁止を求める世論が高まると、家長は暴力に頼らず、家庭の秩序と平和を維持し、権威を表明する必要にせまられた。そのうえ、家庭の平和を称揚する声が上がリ、広く流布したため、一八五三年には婦女子加重暴行防止・処罰法案さえ発布された。『ドンビー父子』においてトウドル一家の平和な団欒がドンビー一家の家庭崩壊とは対照的に理想的な家族の姿として描かれているように、当時の小説はおしなべて家庭の平和を称揚し提唱している<sup>4</sup>。但し、このような時代思潮によって家庭内における男性の暴力行為が激減したかどうか疑わしい。現実的な改善にいたる道は遠く、厳しかったようだ。反抗する妻を鞭打つ女房打ちや、女房売りという野蛮な風習は二十世紀初頭の第一次世界大戦前後まで公然と実施されていたのである。一八八六年に出版されたハーディの『キャスタブリッジの町長』におけ

る妻子売りの話も作り事ではなかったのだ。裁判沙汰や殺人事件等々のスキャンダルにならない限り、家庭内における女性に對する男性の暴力は、多くの場合、日常茶飯事として黙認されていた可能性が高い。家庭内暴力を法律で取り締まるのは当ても今も難しいように思われる。

では、ディケンズは家庭内におけるドンビーの暴力をどのよう抑制しているのか。役割分担の原則に従うと、家庭の管理は一家の女主人の仕事になる。但し、妻が何らかの理由(死亡、病氣、出奔等々)でこの役割を担えない場合、親類縁者の女性(特に、夫婦いづれかの姉妹)がこの役を果たすが当時の慣習だった。ディケンズが妻キャサリンの姉妹と同居し、妻との別居後も義妹ジョージナと同居していたことは有名である。『イースト・リン』でも夫の姉が家事全般の采配権を握っている。ここで興味深いことは、改心前のドンビーが親族の女性(姉のチツクス夫人)よりも使用人(例えば、カーカーやピプチン女史のような職業婦人)に厚い信頼をよせていることである。ドンビーは家族の中心的な存在として跡取り息子が会社の名前と資産を引き継ぐことを大前提としているため、イーデイスが提案するフロレンスを中心とする、家族の感情的な絆の構築には無関心だった(第四〇章)。彼の壮大な夢の実現には家族の情緒的な絆よりも金銭関係に基づく被雇用者の協力体制がはるかに望ましかったのである。これは裏を返すと、妻や娘の心の声は彼に全く伝わらず、常に無意味な不協和音でしかなかったということであろう。皮肉なことに、大富豪のドンビーは妻の出奔を

知らされるまで、家族に暴力をふるう必要がないほど家族関係に無知無関心でいられたのである。

ドンビー父娘の力関係を逆転させたものは何か。勿論、それは駆落ちという形で現れるイーデイスのドンビーに對する謀反である。ドンビーが結婚に際してイーデイスに要求したことは家庭の管理と跡取り息子を産むことの二つだが、男性の欲望を満たすことを断固として拒否するイーデイスは彼の目論見を二つとも見事に打ち砕く。ドンビーとイーデイスの結婚、そして、その破綻を目論んだのがバグストック少佐だとすれば、ドンビー父娘の和解はイーデイスの出奔なくして、また、イーデイスのカーカーへ向けた殺意(カーカーが二人の結婚生活に介入しなかったならば、間違いない)、威圧的なドンビーへ向けられたであろう殺意)なくしてありえなかったのではないだろうか。図版③は駆落ちしたイーデイスとカーカーがディジョンのホテルで対峙する場面である。彼女は侍女を一人も伴わず単身で、深夜に、外国の見知らぬホテルへ乗り込み、カーカーと対峙し、しかも、ナイフを手にして彼の目論見(彼女を誘惑し、飽きると捨てる)の裏をかく。以下の引用は彼女を抱きしめようとする(正確には、凌辱しようとする)カーカーと彼の出ばなを折ろうとするイーデイスの緊迫したやり取りである。

彼が彼女の方へ浮かれ気分近づくと、彼女はとっさにテールの上にあつたナイフを掴み、後ろに一步下がった。

「動かないで！」と、彼女は言った。「これ以上近づくと、命



図版③「勝鬨をあげるカーカー」（第54章、フィズの挿絵）

決鬨しながらカーカーの魂胆を看破するイーディスといじけた様子カーカー。キャプシヨンの皮肉が興味深い。

がないわよ」

二人は立ったまま互いを見詰めた。彼は顔に浮んだ怒りと驚愕を抑え、軽い調子で言った。

「さあ、さあ、気を鎮めて。我々二人つきりなんだからさ。他に見る人も聞く人も居ないんだ。かまとどぶつて、ぼくの度肝を抜く気かい？」（中略）

「あなたが向こうの椅子に座るまで何も話しませんから——もう一度言います——近づかないで！ もう一步たりとも！ そんなことをするなら、わたしも誰にも知られないように、あなたの命を奪います！」と、彼女は息巻いた。

「君はぼくとドンビー氏を取り違えてはいないか？」と、彼はにやりと笑って、言った。（第五四章）

カーカーは彼女が一瞬でも怯めれば、彼女を床に組み敷き、凌辱しそうだが、彼女は決して狼狽することなく、追手が身近に迫ると、忽然と姿を消し、カーカーをドンビーの怒りの餌食にする。彼女の姦通は、結局のところ、未遂なのである。ここで問題になるのは、カーカーに対して武器を手にして自らの意志を貫くイーディスの女性像があまりにも現実離れし、メロドラマの一場面にしか見えないことであろう。武器を手にして、男性と対峙するイーディスは突如として男性に変貌し、決鬨に臨んでいるかのようだ。彼女の介添人は誰だろうか。武器はイーディスよりもアリスに似合いそうである。家庭内暴力が論議的だった当時、女性の社会的立場は依然として低かった。彼女た

ちは男性と対等の立場に立つに足る教育や訓練を受けられず、また、キャリア経験を積む機会も少なく、精神的にも肉体的にも男性より劣っていると考えられていた。最後の完結作品である『互いの友』のヒロインがテムズ川のボート漕ぎを生業とすることから推すと、ディケンズは概して労働が課せられる労働者階級の女性でもない限り、女性には男性に匹敵する知力体力はないと考えていたようである。

当時の小説では精神的肉体的に弱いヒロインが圧倒的に多い。例えば、『バリー・リンドン』ではイーデイスのように才気煥発で母性愛豊かな女性は、決闘好きの男性の甘言に惑わされて結婚し、その後は「教師の前で震え慄く子ども」（第一章）のように大人しくなる。決闘や家庭内暴力が禁止される反面、家長には依然として婦女子の監督権が法律で認められている。無力な子どもの状態に後退させられた妻は、夫の虚栄心や自己顕示欲を満足させる絶好の客体だったのである。『イーレスト・リン』でも子どもに後退させられた妻が絶賛されており、駆落ちした妻が「内気で無垢な子ども」（第三部第二三章）のように一旦捨てた家庭に舞い戻り、継母に疎んじられる息子たちの養育に献身的に励むと、家族は彼女の母性愛のゆえにその咎を許し、元夫でさえも彼女と和解する。

このように妻が子どもに後退する関係が夫婦円満の秘訣だったとするなら、ドンビーとの身体的な接触を極力避け、彼の威圧的な言動にもはや耐えられなくなると、カーカーと出奔するイーデイスは、スキュートン夫人が厳しく彼女を諫めるように、

鼻持ちならないほど高慢な女性ということになる。ところが、ディケンズは決してイーデイスを身勝手な女性として描いていない。彼女は天真爛漫な子ども時代の喪失を嘆き、フロレンスが家族によせる無条件の愛情を全面的に信じ、彼女に未来を託している。カーカーとの決闘さながらの対峙は不自然だが、この理由はディケンズが「妻」と無垢な子どもを同一視する当時の風潮に賛同しなかったことに起因すると思われる。

周知のように、イギリスでは産業革命後、家族形態は大家族から核家族へ移行し、父母子の情緒的な絆が家族の支柱とみなされるようになった。封建的なドンビーが新たな核家族の形態に馴染むには、まず先に、彼自身の独善的な人格が強靱な精神力に恵まれた別の人物（ここではイーデイス）によって打ち砕かれなければならなかったのである。魅力的な外見によってドンビーとカーカーを惹きつけ、二人の利己的な欲望を同時に阻止しようとするイーデイスの強靱な精神力は、極論すれば、時代の変化に適応しようとするディケンズ自身の旺盛な想像力の現れと言っても過言ではないだろう。

疾走する汽車はカーカーの肉体を木端微塵に砕き、ドンビーの決闘を阻止し、イーデイスのように自立願望が強い女性の誕生を可能にする。男性と対峙する女性が従順な女性を保護する物語の構図は、家庭の平和という新たな命題に挑戦したディケンズにとって、あまりにも新鮮で、その非現実性を見逃すほど魅力的だったにちがいない。イーデイスが握るナイフの矛先は、フロレンスが父親を盲目的に敬い慕い、必要としている限り、

彼に向けられることはなかったのである。

#### 第四節 線路は続くよ、どこまでも

フロレンスの物語を性と暴力の関連から読むと、これが前節で論じたヴィクトリア朝独特の家庭の平和を志向している反面、アリス・マーウッドの物語の別ヴァージョンになる可能性を秘めた曖昧な物語であることが明らかとなる。フロレンスは家族の中で影が薄く、いつも家族の輪の周縁にいたため、いつ何時、迷子になり、都会の闇に埋もれても不思議ではない環境の下で成長する。例えば、彼女は幼い頃、ロンドンの街頭で乳母たちと逸れ、迷子になり、古着や性の売買を生業とするブラウン婆さんに捕まる。ブラウン婆さんがフロレンスの豊かな髪を見て、娘のアリスを思い出し、憐憫の情に流されなかつたら、フロレンスは身ぐるみ剥かれ、乞食のような姿で通りに放り出される代わりに、高値で売春宿へ売り飛ばされたに違いない。また、ドンビーに殴打され、家出した時、彼女をドンビー家のお姫さまとして丁寧に世話するウォルターや彼の仲間たちがいなければ、彼女は『イースト・リン』のヒロインのようにフロレンス・ドンビーという名前を捨て、偽名を語り、ジェイン・エアよりも不運な家庭教師になったにちがいない(第九九章)。ウォルターと結婚した後も、彼女の生活は不安定で、暴力による破壊の危機に絶えず直面していたであろうことが示唆されている。ロンドンから広東まで貿易商の妻として船旅

をするフロレンスの場合、中国における一八四〇年代および六〇年代の二度のアヘン戦争やインドにおける一八五〇年代後半のインド大反乱を念頭におくと、彼女がアリスよりも多くの辛苦をなめる可能性は高かったのだ。つまり、フロレンスの物語では、彼女はドンビーと和解しない限り、身の安全も生活の安定も確保できないのである。ディケンズがドンビー父娘の情緒的な絆を基軸とする家庭の平和を強く希求する背景に、交通網と商業ネットワークの拡充がもたらす想定外の暴力に対する強い懸念があつたことを忘れてはいけない。

親の無関心、育児放棄、遺棄などの事情から、無防備に街頭に放り出された幼い女の子が陥る苦境は、残念ながら、『ドンビー父子』が出版されてから一五〇年を経た今日も昔と変わらないように思われる。暴力に晒される子どもを題材にした小説は、イギリスに限らず、広く世界中で枚挙にいとまがない。例えば、ドリス・レッシングは『暴力の子どもたち』を二十世紀後半に二〇年近い歳月をかけてシリーズで出版している。本節ではフロレンスが家族から逸れ、家なき子になり易い環境にいたことに着目し、『ドンビー父子』における暴力の現代性について考察し、本論文のまとめとしたい。決闘を封印する鉄道は、昔ながらの街並みを迷路へと変貌させ、親の保護を失った子どもたちを混乱の渦へ巻き込むのである。

図版④は幼いフロレンスがロンドンの下町の街頭でブラウン婆さんの手に落ちる直前の騒動を描いた挿絵である。見逃せない点は、フロレンスが家族(正確に言うと、乳飲み子であ



図版④「ポリーの『切磋琢磨』救出」  
 (第6章、フィズの挿絵)  
 街頭の騒動に巻き込まれたフロー  
 レンス。ポールの産着の裾に軽く  
 ふれる彼女の存在はすでに迷子の  
 ように影が薄い。

る弟ポールの安全を最優先にする使用人たち)の周縁にいたため、誰にも気付かれずに群集の中に紛れ込み、行方不明になることである。まず、事の顛末を簡単に説明すると、住み込みの乳母としてドンビーに雇われていたトワードル夫人は、ドンビーの許可なく、久しぶりにドンビーの子どもたちを連れて家族のもとを訪れる。帰り道で偶然長男のロブが着ている貧民学校の制服のことで近所の子どもたちに虐められているのを目にすると、彼女は後先見ず、ポールをフローレンスの家庭教師であるスーザンに託し、ロブを助けに駆け出す。ちょうどその時、馬車が通りかかり、スーザンとドンビー家の二人の子どもたちはあわや車輪の下敷きになるところを通りがかりの人に助けられる。そこへ、一息つく間もなく、暴れ牛が乱入し、あたりは騒然となる。大混乱の中で迷子になるのは地域の事情に疎く、信頼できる保護者もない幼いフローレンスである。

「スーザン！ スーザン！」と、我を忘れたフローレンスは両手を握りしめながら絶叫した。「おお、どこなの？ みんなどこなの？」

「おお、どこなの？ みんなどこなの？」

「どこなのかね？」と、声がしたかと思うと、通りの反対側から老婆がふらっと跳んできた。「どうしたんだねえ？」

「びっくりしてしまったの」と、フローレンスは答えた。

「何をしたのかわからなくて。みんなと一緒にいると思ったのに。みんなどこなの？」

老婆は彼女の手首を掴むと、「連れてってやるよ」と言った。彼女はとも醜い老婆で、目のふちは赤く、喋っていない時でも口をもぐもぐ、がちがちさせていた。服装はみすばらしく、腕に皮らしいものをかけていた。（中略）

「さあ、さあ、怖がらなくてもいいんだよ」と、言いながら、彼女はフロレンスの手をしっかりと掴み直した。「さあ、おいで」（第六章）

フロレンスはこのように一瞬のうちに人さらいの手に落ちる。勿論、彼女が連れて行かれる場所は大通りから奥まったところにある「泥だらけで、ねずみの大群が住みつき」、「隙間と裂け目だらけの汚れた小屋」である。フロレンスはそこで瞬間に、金持のお嬢さまから襤褸をまとった乞食に変えられる。彼女の失踪経験は雑多な人間がそれぞれ異なる目的と欲望をもち、自由に移動できる都会の恐怖を如実に表している。

この逸話は次の二点において興味深い。第一に、ブラウン婆さんやトウドル一家が住むこの界隈が鉄道敷設の工事中であることだ。地域全域が機能不全に陥るほどの混乱状態にあるため、一旦見失ったが最後、姿を消した子どもの方角を追うのは極めて難しい。「家々は打ち壊され、通りは塞がれ行き止まり。地面には深い穴や溝が掘られ、至る所に夥しい泥や土の山ができていた。（中略）四方八方にどこにも通じない橋と通りがあった」（第六章）。科学技術の急激な発展により、地域の風景は一変し、いつ何時、どこで、誰が迷子になっても不思議ではない

ほどである。第二点はこの章において複数の主要人物の物語が交錯し、互いに影響し合い、ドンビーの世界の脆弱さが露呈することである。言い換えると、ドンビーは迷子になったフロレンスを介してブラウン婆さんが住む未知の下層社会とつながり、ドンビー父子商会だけでなく地域全体の進歩発展と安全にも道義的な責任を負うことが示唆されるのだ。デイケNZは鉄道敷設という環境の大変化が無垢な子どもにとっていかに危険であるかを熟知していた故に、この作品において彼らが晒される暴力を仔細に検証しているのである。

変貌する都会の雑踏の中では、子どもたちは時と場所の区別なく、また、階級の区別なく、行き場を見失い易い。彼らを保護するはずの管理体制はドンビーが信じるほど盤石ではない。ドンビーは子どもたちが労働者階級の使用人たちと親しく交わるのを禁止し、乳母の職務怠慢を厳しく叱責し、彼女を解雇して新たに別の乳母を雇い入れる。彼はこれで万事が円満に解決したと安直に考える。ところが、デイケNZは労働者階級の子どももまたフロレンスと同様に迷子になる可能性があることを示唆している。下町界隈で生まれ育ったロブは路上でブラウン婆さんに度々捕まり、彼女の巢穴に無理やり引きずり込まれ、遂にはカーカーの秘密を漏らす羽目に陥る。ロブよりはるかに界隈の事情に詳しいはずのトウドル夫妻でさえ、息子がブラウン婆さんの罠に落ちるのを阻止できない。鉄道敷設前のロンドン背景とした『ピクウィック・クラブ』では、ウェラー父子は下町界隈の出来事に精通していることを豪語し、父親は子

育て自慢に余念がない。「せがれの教育にや気をつけておりましたよ。なんせ、小せえ頃から街ん中を走らせ、自分のことは自分でやらせていましたからねえ」(第二〇章)。しかし、『ドンビー父子』ではもはやこのような自信に溢れた父親の豪語はなく、ロブもフローレンス同様に父親でなく家族の友人トックス嬢に救済され、家族の輪へ戻る。ドンビーの世界では科学技術の発展による文明化と暴力が切り離せない故に、個人の経験や知恵は家庭の平和という社会理念に昇華され、都会のセイフティ・ネットとして広く社会に推奨されている。

ディケンズはこの作品において鉄道敷設の驚異的な影響を仔細に検証し、家庭の平和を、イーディスの人物造型を歪曲するほど熱烈に提唱している。新しい時代の到来を象徴する疾走する汽車は、家父長制社会の慣例的な問題解決方法である決闘を封印し、情緒的な絆に基づく家族形成を促し、新しい物語の誕生を可能にしたと言っても過言ではないのである。

注

1 ここに挙げた裁判と決闘という二つの事態收拾方法は、いずれも有産階級で行なわれた。労働者階級では「女房売り」等々の名目で妻の交換もあったという。近藤和彦「異文化としての歴史」『民のモラル』(山川出版社、一九九三年)五二〇頁を参照。

2 『バリー・リンドン』後半部における決闘後の主人公の女性や

子どもに対する傍若無人な暴力行為は、決闘と暴力の関連性を考えるうえで注目に値する。

3 クリステヴァによると、汚れ、滓、女性、母親と自己との同一視の形で表れる「卑下 (abjection)」は、死ぬほど強く感じられる存在の無意味さから自己を守る効果的な自己防御となる。Julia Kristeva, *Horrors of Power: An Essay on Abjection*, trans. Leon S. Roudiez (New York: Columbia UP, 1982) 7.

4 『ドンビー父子』と同時期に出版された女性作家の作品でも家庭内における男性の暴力は主要な題材であり、これに対するアプローチ方法は、興味深いことに、それぞれの作家によって異なる。プロンテ姉妹の『ジェイン・エア』(一八四七年)、『嵐が丘』(一八四七年)、『ワイルドフェル・ホルルの住人』(一八四八年)、そして、ギャスケルの『メアリ・バートン』(一八四八年)における暴力と本作品における暴力を比較すると、父娘関係において父権の権威を表すディケンズ文学の特質が明らかになる。

5 J・L・マーシュはブラウン婆さんがフローレンスから高価な衣装を剥ぎ取り、代わりにウサギ皮の古着を与えることに着目し、フローレンスがファニー・ヒルのような娼婦になる可能性のあったことを示唆している (Marsh 411)。また、ジョン・サザランドは『ドンビー父子』のテクストの空白に着目し、マーシュの解釈に全面的に賛成してゐる。John Sutherland, *Can Jane Eyre Be Happy?: More Puzzles in Classic Fiction* (Oxford: Oxford UP, 1997) 13.